

フォークス

プロダクション・ノート

ニッキー

「ペテンがバレても、絶対に認めないこと」

ニッキー。百万ドルの笑顔と、完璧なまでにさりげないスタイルをもち、クールで要領がいい。いつもリラックスしていて、とてもチャーミングな男。だが油断して彼に背中を向けるな……一瞬でも、視線<フォーカス>を盗ませてはいけない。

そして、ジェス。誘うような豊かなブロンドをなびかせ、ミニスカートの腰を振って歩くゴージャスなこの若い女は、プロの詐欺師を目指している。“装備”は万全だが、彼女には経験が乏しい。詐欺師として正しい振る舞い方を教えてくれる指南役が必要だ。

ウィル・スミスとマーゴット・ロビー主演の『フォーカス』で描かれるのは、極めて洗練された盗みのプロの世界。冒頭から高いテンションが、ストーリーの展開とともにさらに盛り上がっていく。ニッキーが詐欺師としての熟練の技を見せるなか、舞台は雪のニューヨークから太陽が輝くニューオーリンズ、さらに南米でもっとも味わい深い街のひとつ、アルゼンチンのブエノスアイレスに移っていく。そういうロケーションを背景に一年でもっとも盛り上がるアメリカン・フットボールの試合や極めて競争の激しいカーレースの世界を展開し、すべての要素がそろって、エネルギーあふれるアクション、アドベンチャー、そしてロマンスのお膳立てができる。

「僕は『ラブ・アゲイン』がとても好きだった」とニッキー役のウィル・スミスは言う。「だから、ジョンとグレンがまた新しい脚本に取り組んでいると聞いて、僕がハマるならどんな役でもいいからぜひ出たいと思ったんだ。そして脚本を読んでみると、コメディ、ドラマ、心理描写、陰謀が見事に融合していると思った。ひとりのキャラクターに要求される行動の幅が広がったんだ。俳優として、僕はそのチャレンジに大いに触発されたよ」

脚本・監督パートナーであるグレン・フィカーラとジョン・レクアは、まず自分たち自身にこう問いかけて本作のストーリーを思いついた。「恋愛には信頼関係が必要だ。信頼が利用される世界で生きるふたりが、果たして恋に落ちることはできるのか？」

「僕にとって、そんな“関係”がこのストーリーの入り口だった」とフィカーラは言う。「一緒に仕事をするふたりの人間が恋に落ちる。それはふつう、警戒を解くことを意味するわけだが、この映画のキャラクターたちにとっては自分たちの本質と真逆の状態になってしまうんだ」

レクアはこう付け加える。「詐欺師というのは、詐欺師特有の技術を使って人々の心を操る。狙った相手に心を開かせ、最終的には信頼を勝ち取る。その一方で、人を信用しないことが詐欺師自身の本質だ。そんな詐欺師のふたりが、ふつうなら互いの邪魔になってうまくいかないはずの競合するそういう性質を乗り越えられるかどうかを探ると面白いんじゃないかと僕たちは思ったんだよ」

レクア、フィカーラとは『ラブ・アゲイン』でも組んだ製作のデニス・ディ・ノービはこう語る。「彼らの才能の豊かさは知っていたのよ」と彼女は言う。「でもこの映画の初稿を読んだときは、その巧妙さ、情緒の豊かさ、豪華さ、そして小粋さに圧倒されたの。それらすべての要素が、複雑なパズルのように、いかにうまくまとめられているかにも」

「脚本を読み始めてすぐに惹きつけられたわ」と、ジェス役のマーゴット・ロビーは思い返す。「ユーモアがあり、胸を揺さぶるようなシーンのドラマチックな展開があり、さらに、とても興味をそそられる複雑なプロットだったから。表面的にも、裏側でも、それはもう、さまざまなことが起こっている脚本だった。私は、恋なんてしている余裕がない世界、信頼は人を操るため、その人から盗むための道具でしかない世界に生きるふたりの詐欺師が恋に落ちたらという発想がすばらしいと思ったの」

フィカーラは、非常に複雑なストーリーの細部——人間関係の掘り下げも必須条件——を練り上げるうえで、いくつもの要素のバランスをとるのが難しかったと説明する。「詐欺を描く映画というのは本質的に、プロットを成立させるために観客に明らかにする要素はできるだけ少なくするものなんだが、ロマンチック映画で

は、キャラクターたちの言動の動機をもっと明らかにする必要が出てくる。感情描写のためにプロットを妥協させることはできないが、かといって、ストーリーを動かすための感情描写も必要だ」

レクアは、脚本上の要素が実際にどのように展開するかに関して抱いていたどんなリアルな懸念も、いったんキャストが決まると消すことができたと言語。「ウィル、マーゴット、そしてほかの俳優たち全員が、それぞれの役に充分すぎるほど生命を吹き込んでくれた。彼らのおかげで、僕たちは微妙な部分もうまく展開させていくことができたんだ」

ニッキー

**「俺はこの仕事を長いこと、うまくやってきた。
そんなとき、あの子が現れたんだ」**

何でも器用にこなす男ニッキーは、だまし合いの世界で育った。彼はそんな家族のもとを去ったが、それでも、瞬間的なスリから、巧みに練り上げた長期間の詐欺まで、そしてその中間のあらゆることをしながら、その“家業”を続けている。

「ニッキーは、人が人生で出会うなかでいちばん頭がよく、もっとも社会的規範から外れた人間のひとりだ」と、ウィル・スミスは自分が演じるキャラクターについて語る。「彼は人間性と人間の行動パターンを理解している。彼ほど奥深くまでそれを知り、理解している者はめったにいない。だが彼は幼いときに人からこっぴどく裏切られ、自分の能力を善に使うべきをいまだに学んでいないんだ」

監督のグレン・フィカーラはこう語る。「ニッキー役のカastingを初めて考えたとき、僕たちはウィル・スミス——その親しみやすさとチャーミングな人柄で有名——がこの人物を演じることに興味をもってくれたら最高だと思ったんだ。ニッキーは誰をも惹きつけることができるが、それはすべて演技なんだよ。人々に見せている顔の下には冷静な計算がある。僕たちは、ウィルがニッキーをどう演じるか、すごく見たかった」

同じく監督のジョン・レクアもこう語る。「ウィルは、伝統的な意味で俳優としても、即興のパフォーマーとしても素晴らしい。そして、そのシーンの共演者たちの助けとなるように書かれたセリフの枠の中で、ちょっとした、さりげないアドリブを考え出すことに関してとくに優れているんだ。彼は、人のために何でもやろうという精神が強い。共演者の演技をさらによくするために必要なものを与えるような形で彼自身の演技を形作っていく。要するに、彼は自信のあるアーティストがどう行動するかをよく理解しているということだ」

そのスミスは笑みを浮かべて、「グレンとジョンは監督コンビとして、かつてカジノやストリップ・クラブを営んでいた愛情深い親たちみたいなものなんだ」と言う。「彼らは、子供たちが毎日元気に過ごせるようにつねに気を配り、家業が繁盛するよう一生懸命働き、子供たちがいずれ働くようになったときに、最高の力を発揮できるくらいその仕事に夢中になってほしいと願っている」

ニッキーがその業界で最高の腕をもつひとりであることは明らかだが、彼についてレクアはこう説明する。「彼の心の中では、人が成長するにつれて自然に深めていくような資質——共感、同情、愛情——が決して発展しなかった。彼はほかの人々へのさまざまな感情を、稼ぐための意欲に転化させたんだ。そして彼はじつによく稼いでいる」

製作のデニス・ディ・ノービはこう付け加える。「ニッキーはとても興味をそそられるキャラクターだと思う。彼は才気にあふれ、頭が切れ、観察力が鋭い……ほとんどどんな分野でも成功できるであろう資質のもち主よね。でも彼の場合は子供のころにつらい目に遭ったために、詐欺師になることを選んだ。大成功しているけどね」

ニッキーは、どんな標的であろうとその弱点を見抜く達人だ。だが、自分自身の弱点に遭遇したときにはそれを見抜けない。その弱点がジェスである。ニューヨークで初めて会ったときはすぐ別れたが、その後、彼はニューオーリンズでの仕事のチームに彼女を加える。酒が大量に消費され、人が押し寄せるその街には、現金、高級時計、宝石、電子機器などがあふれ、他人のちょっとした油断につけ込むべく訓練された者たちにと

って、いいカモだらけだ。師匠であるニッキーを早く満足させたいジェスは、のみ込みも早く、熟練のプロのように与えられた仕事をやってのける。

マーゴット・ロビーはジェスを大いに楽しんで演じたようだ。「ジェスは俳優にとって夢のキャラクターよ。映画の中で大きな変化を遂げるんだもの。最初は、ただの若い女——経験不足で、ある意味、ダイヤの原石——だけど、最後にはまったく違うところに行き着く。それを演じるのはものすごく楽しかった」

ディ・ノービは、ロビーとスミスは最初から息が合ったと言う。「私はこれまで、主演ふたりのケミストリーが作品の成否を決めるような映画をたくさん作ってきたけど、撮影開始からの数日は、それが生まれるまでいつもハラハラするものなの。ウィルはとてもダイナミックで、マーゴットがセットに入ってきたとき、ふたりはすぐに互いに反応し、打ち解けて冗談を言い合い始めたの。彼女は、大スターであるウィルに対してまったく気後れせず、大胆で自信をもって演じていて、いつもどおりのウィルはそんな彼女の様子をとても気に入っていたわ」

「ウィルと私は、最初からそれぞれのキャラクターにふさわしいエネルギーをもってたんじゃないかな」とロビーは言う。「会ってすぐに打ち解けられたおかげで、ふざけ合ったり、アドリブを言ったりするのがやりやすかったわ。あっという間に友達になれたの」

彼女は、即座に仲良くなれたのは、スミスの寛大な人柄のおかげだと言う。「ウィルは最高よ。彼はほんとうに面白いし、そこにいるだけでポジティブな雰囲気を出す人。とても協調的で感じがいいのよ。実際、私は彼があればほどの大スターで、熱烈なファン層がいることを忘れていたくらい。アルゼンチンでの撮影初日に、トレーラーの外に何千人ものファンが集まっているのを見て、それを思い出したの」

「マーゴットはすごい」とスミスもロビーを褒める。「彼女はまさにエネルギーの小さな塊みたいだ。僕はどの映画のセットでも、いちばんエネルギッシュな人間であることを誇りに思ってきた。職場は楽しく、明るい場所にしておきたいんだよ。この仕事を始めて 20 年以上になるが、スタッフを楽しませ、セットの雰囲気を意気揚々とさせ続けることに関して、僕を降参させたのはマーゴットが初めてだった」

監督のレクアはロビーを“自然児”と呼び、こう付け加える。「僕たちは彼女にたちまち惹きつけられた。彼女の知性と意欲満々なところがジェス役にぴったりだったし、彼女が部屋に入ってくると、その場がパッと明るくなった。最初からそんな感じで、無理なく役に入っていた」

ニッキーとジェスは、あるバーで出会う。ニッキーは美女をナンパしたつもりだが、じつは彼女のほうが彼に罠を仕掛けたのだ。だますには最悪の相手とは知らずに、ジェスはニッキーの詐欺の腕にたちまち魅せられ、彼への弟子入りを熱心に頼む。彼は教えることに同意したが、彼女の感情表現の豊かさに嫉妬するようになると同時に、それは彼を脅えさせる。彼は人を手なずけるのが商売ではあるものの、人と心の距離を保つことで安心感を覚えるようになってもいたからだ。彼の友は共犯者たちだけであり、彼らにとってもニッキーは仕事でつながる仲間だ。

ニッキーが極めて順調に動かしているチームには、じつにバラエティに富んだメンバーがそろっている。それぞれ独自の才能をもち、おそらく彼らがまっとうな人生を歩んでいたとして手に入れたであろうレベルよりもずっといい生活をしている。そしてその才能がいちばん“らしく”ないのがファーハドだろう。その彼を演じるアドリアン・マルティネスはまさに絶妙な表現をする。「彼はいわば“陶器店に迷い込んだ牛”だね。いかにもその場にふさわしくない。でも、そうは見えなくてもじつはコンピューターの達人、頭がいい男なんだよ」とマルティネスはにやりと笑い、ニッキーのチームの主力メンバーであるファーハドとして、含みのあるセリフを練ることをとくに楽しんだそうだ。

監督コンビのひとり、フィカーラは、マルティネスがこの役を演じるうえで見せた創造性に感心したと語る。「ファーハドに関して僕らは、愉快的なキャラクターを想定して脚本を書いた。でもアドリアンはそれに留まらず、キャラクターを完全に創り上げた。彼はファーハドという人物を次のレベルまで発展させ、とても興味深く、しかも意外な形で肉付けをしたんだ」

「僕にとって、この映画は裏と表を同時に描いている作品なんだ。今、こうして交わっている会話を描きつつも、交わっていない会話もじつは描いているんだよ」とマルティネスは説明する。「何かが起こっているときは

いつも、何か別のことも起こっている。人生もそうだよ。何かやりながら、別のことを考えていることがしょっちゅうある。今、見ているのは何か、そしてほんとうは何を見ているべきなのか？ この映画の男たちはその両方を同時にこなす。そうしながら、何百万ドルも稼ぐ能力があるんだ」

ファーハドはおそらくニッキーにいちばん近い存在だろう。ふたりが長年組んできたことは明らかだ。そしてマルティネスは、スミスのおかげでその親密さを表現しやすかったと語る。「ウィルは度量がすごく大きい。僕を迎え入れ、道化役とかジョークの種になるとか、僕のやるべき演技をさせる。そういうとき、彼は僕が輝けるようにしてくれた。誰に対してでもそうだったよ」

ニューオーリンズで訣別したニッキーとジェスはアルゼンチンのブエノスアイレスで再会する。彼女に気づいたニッキーは、自分がいまだに彼女のことをふっ切れていないことを思い知っただけでなく、彼女が明らかに彼とのことを乗り越え、成長していることを知り、動揺してしまう。そしてこともあろうに、彼女が今、恋愛関係にあるのは、ニッキーがまさに取引をしようとしている男だった。スペインのレーシング・チームのオーナーで大富豪のラファエル・ガリーガである。

このレース界の大物を演じる俳優に、フィルムメーカーたちは以前にも組んだロドリゴ・サントロを選んだ。「ロドリゴはガリーガを演じるうえで、とても面白いアプローチをとった」ともうひとりの監督レクアは言う。「単なるマッチョでパワフルなラテン系の悪党として演じるのではなく、穏やかそうでいて、何かあればかんしゃくを爆発させそうな雰囲気を感じさせた。それによって、あのキャラクターがとても深まったと思うよ」

「ガリーガは演じるのがとても楽しいキャラクターだったよ」とサントロは言う。「彼は大金持ちのヨーロッパの紳士で、レーシング・チームのオーナー。カーレースは彼がほんとうに情熱を捧げているものなんだ。その世界に心底惚れ込んでいるんだが、同時に、彼は実業家なので、ひとつのレースに勝つだけでなく、総合優勝であるチャンピオンシップも確実に獲りたい。だから彼はニッキーを雇うんだ。たとえ、必ずしも合法的とはいえないことをせざるをえないとしても、その目標達成を助けさせるために。ガリーガにとって、それは勝つためのひとつの戦略にすぎず、彼は勝利に付いてくるアドレナリンのほとばしりを必要としているんだ」

役作りの一環として、サントロは時速 320 キロ以上で走る2人乗りのインディカーに乗った。その忘れ難い体験によって、彼はカーレースというスポーツの魅力を初めて知ったそうだ。「あれはすごく興味をそそられる世界だよ」と彼は言う。「10 億分の1秒で勝負を競うスポーツで、ほんのわずかでも——1秒の半分でも、4分の1秒でも——優勢に立つために、人々は何百万ドルもつぎ込むんだ」

莫大な金が絡むレースで失敗は許されないなか、ガリーガは勝つために詐欺師を雇うわけだが、当然ながら、彼はニッキーから目を離さないよう、あらゆる対策をとる。ガリーガの警備チームを率いるオーウェンズは、熟練詐欺師であるニッキーの裏をかくという、誰もやりたいとは思わない任務を課せられる。

人を信用しないオーウェンズを演じるジェラルド・マクレイニーはこう語る。「疑うことがオーウェンズの仕事なんだ。彼は初めてニッキーに会ったとき、ボスのガリーガにあの男とはかかわるな、ロクなことにならないと警告する。もちろん、ガリーガは耳を貸さない。あまりにも賭けているものが大きすぎるからだ」

「ジェラルド・マクレイニーはずいぶん前から僕らが注目していた俳優なんだ」とフィカーラは言う。「彼と組むのにふさわしい機会が訪れることを願っていたんだが、このオーウェンズ役は彼にぴったりだった」

ベテラン俳優のマクレイニーは脚本を読んですぐ本作が気に入った。「この脚本で私が何よりも惹きつけられたのは、セリフの練り上げられ方だった」と彼は思い返す。「ウィットに富み、知的で優雅。歯切れのいい、はっきりしたセリフで、テンポがすばらしい。カーレースと銃撃戦が登場する映画だが、カーレースと銃撃戦に頼らずに観客を楽しませることができる」

そのほかの主要キャストとしてフィカーラとレクアが選んだのは、賭けが大好きなビジネスマン、リ・ユアンにB・D・ウォン、ニッキーの右腕ホーストにブレナン・ブラウン、カーレース場でガリーガの——しいてはニッキーの——標的となるマキューエンにロバート・テイラーである。

そして、カーレースの世界を舞台にしたストーリーは、サーキットを疾走する車の光景——と音——がなければ完全ではない。そこで、元インディカーのドライバーで、今はブライアン・ハータ・オートスポーツを率いるブライアン・ハータ、そしてデビュー戦のインディ 500(インディアナポリス 500)で2着に入った新進スター、カ

ルロス・ムニョスがハンドルを握った。

だが、スクリーン上のリアリズムを徹底させるためにフィルムメーカーたちが起用した鍵となる人物はおそらく、盗みの技を習得するためにキャストを訓練した“ザ・ジェントルマン・シーフ(紳士的な泥棒)”だろう。

ニッキー

「人を信用させるツボがある」

ニッキーと彼のチームの極めて細かい動作、そしてどんなにさりげないとしても、あらゆる動きは完璧にプ
ロらしく見えなければならず、さらに、カメラで捉えなければならない。

「スリの瞬間を撮影するのは難しい」と監督コンビのレクアは断言する。「何世紀にもわたり磨かれてきたス
リの技術は、誰にもその瞬間が見えないように考え抜かれたものだからね」

その行為をカメラで捉えるため、監督コンビのフィカーラによれば、特定の角度から撮影したり、動き自体
をゆっくりさせたりしたそう。また、「何度かは、そのシーンでスリをおこなうときのスペースを広くとり、何が
おこなわれているかが見えるようにした。通常はそういうことはないよ。スリはまったく見えないようにおこなわ
れる」

キャストに準備させる時期が来ると、フィルムメーカーたちは世界的に名高いスリのエキスパート、アポロ・
ロビンス、通称“ザ・ジェントルマン・シーフ”に協力を求めた。独自の巧妙な手の動きを編み出して演出し、ス
ミス、ロビーほかのキャストにスリの技を教えるためだ。

「この映画で描く世界について調べていたとき、ものすごい手品師、詐欺師として彼の名前にしょっちゅう出
くわした」とレクアは思い返す。

「特定の技をどう成し遂げるかということに加え、人々を信用しない世界で生きるのがどういうことなのか、
アポロはその実態を詳しく教えてくれた」とフィカーラは付け加える。

「僕は生涯を通して策略や人間の行動について研究してきた。ちょっと風変わりな方法……人から何かを
盗むことで」とロビンスは認める。「肝心なのは、相手の目を逸らすというよりは、彼らの気持ちを捉えることな
んだ。彼らの注意をコントロールしているのは夢、願望、そして恐れだ。人間というのは、実際にそこにあるも
のよりも、自分がそこにあると信じたいものを見る。だから、彼らの視線を操ることができれば、彼らにとって
の現実を操ることになるんだよ」

ロビンスは、数日間かけてスミスの役作りを手伝った。「僕は4～5日間、ラスベガスでウィルと過ごした」と
ロビンス。「ウィルはまず、詐欺師の心の中に入り込み、彼らが世の中をどう見るのかを知りたがった。どう考
え、処理し、影響を与えるのかを。それで僕はこの機会にほかの人たちに彼と会ってもらったんだ。ウィルが
演じるキャラクターが住む世界と同じ経験をしている人たちなので、ウィルが直接質問できるかと思って」

「アポロとのコラボレーションは興味深かったよ」とスミスは言う。「彼が何者かを言い表すなら、心理学者と
いうのがいちばん合うね。僕らは一緒に過ごした時間のほとんどを、人々について、脳について、人間が注
意を払う能力について話し合うことに費やしたんだ。この天才詐欺師のキャラクターを創るうえで、僕らが盗
むことそのものに焦点をあてた時間は意外にもごくわずかだった」

ロビンスはパートナーのエバ・ドウと、元詐欺師、窃盗犯、ハッカーたちの特技を利用して、人間の行動を
研究する会社を共同設立した。彼らは、神経科学者、研究者たちと連携し、人間の頭脳の死角を調べている。
「人が一度にほんとうに集中できるのはひとつのものなので、人の頭脳はより効率よく働くための近道をいく
つも創り出すんだ」とロビンスは言う。「残念ながら、そういう近道は、僕らが同時に複数のことをやっている錯
覚を与えつつ、判断のプロセスを自動処理してしまうことがある。それはちょうど、幼児がサッカーをするよ
うなものなんだよ。子供がサッカーボールを一生懸命追いかけているときに、別のボールが次々に転がって
くる。子供は別のボールが来るたびにそれを追いかけることに夢中になり、立ち止まって、誰が何のためにそ
んなにボールを転がしているのかを考えたりしない。ウィルのキャラクターは、こういう種類の無防備さにつけ

込むんだ」

ロビンスは、盗みをやり遂げるために必要なさまざまな技を俳優たちに教えた。たとえば、“リフト”というのは、ポケットから何かを盗み出すことで、そのリフトの中で使われるのが“タッチ”という技だ。ひとつの計画においてそれぞれが果たす役割を説明するうえで、ロビンスはチームをスポーツ・チームになぞらえる。

「スポーツにおいてそうであるように、窃盗や詐欺の段取りを決めるうえで、異なる役割——司令塔、実行役、補佐、仕掛け役——がある。中には、それらすべての役割をマスターして、単独でやってのける者もいて、彼らは“キャノン(大砲)”と呼ばれる。それがニッキーだ」とロビンスは説明する。「キャノン同士が街で合流し、一種のドリームチームを結成することがあり、それは“ウィズ・モブズ”と呼ばれる。この映画で描かれているように、ウィズ・モブズは大きなスポーツ・イベントのだいたい2週間前に街で合流する。彼らは、スリ、ポーカー詐欺、ハッキングなど、それぞれの才能を組み合わせ、無防備な観光客から盗むんだ。自分が標的にされたと気づきもしないうちに」

セットでの“ロビンス塾”でのみ込みがいちばん早かったのは、マーゴット・ロビーだったと言っていいだろう。彼女もまた、ジェス役の前準備のなかでロビンスの名前と出会っていた。「『この人とミーティングができれば、あるいは何とか話だけでもできたらどんなにいいかしら』と思ったのを覚えているわ。そう思っていたら、スリの演出などのために彼が撮影に加わることになったの」

「一緒に仕事できたのは20時間ぐらいだったかな」とロビンスは言う。「マーゴットは物覚えが早いだけでなく、じつに粘り強かった。彼女はまるでブルドッグみたいに忍耐強く、すべてを正しくやりたがり、もっとうまくなるにはどうすればいいかを聞いてきたよ。犯行の難しい手口を驚くほどうまく、自然に見えるようにやってのけた。しかも、彼女はそれを石畳の道で、タイトなドレス、ハイヒールでやらなければならないこともあったんだ！」

「マーゴットはあまりにも上達が早かったので、僕たちは少しペースを落としてくれと頼まなきゃならなかった」とフィカーラは笑う。「僕は撮ったばかりのシーンを何度も再生して、『彼女、今やったのか？ その瞬間、撮れた？』と互いに確かめ合っていたぐらいだ」

「観客は、これまでにスクリーン上で観たことのないものを観ることになると思うわ。アポロのおかげよ」と製作のディ・ノービは言う。「彼が極秘のテクニックを寛大にも教えてくれて、私たちはほんとうに幸運だった」

ジェス

「大きな仕事、やる気でしょ。仲間にして」

本作のストーリーは、それぞれが際立つ個性をもつ、世界的に有名な3つの大都市——アメリカのニューヨークとニューオーリンズ、そしてアルゼンチンのブエノスアイレス——で展開する。フィルムメーカーたちは、それぞれの街で実際に撮影することができて喜んだ。まず、“バイユー(沼のような入り江)の州”と呼ばれるルイジアナ州からだ。

「僕たちは監督デビュー作をニューオーリンズで撮影したんだ」と監督のひとり、レクアは言う。「でもそれはほかの街の代役だった。ニューオーリンズはほんとうに美しい街なので、僕らは次にニューオーリンズで撮影するときは代役ではなく、ストーリーの舞台として撮ろうと決めていたんだ。文化にせよ、建築物にせよ、とにかくすばらしい。僕らはそれをぜひみんなに見てほしかった」

「この映画の風景はストーリーの大事な要素のひとつなのよ」と製作のディ・ノービは言う。「ニューオーリンズは美しく、ロマンチック。そしてエキセントリックな人々を大歓迎してくれる街なので、私たちにとっては多様なものを描けるキャンバスになったの」

ニューオーリンズでのシークエンスは、フィルムメーカーたちのお気に入りの地域、とくにフレンチ・クォーターを目立たせるように特別に工夫された。美術監督のエリザベス・マイケルは、創意工夫を凝らす部分がたくさんあることに胸を躍らせた。「あの街は趣が深く、とてもあったかくて、いろいろな質感があるの」と彼女は言

う。「どこまでも本物という感じ。既存の建築物を隠さずに、活用できるのはとてもうれしいものよ」

バーボン・ストリートで展開するシーンを見せるため、マイクル率いる美術チームは、ネオンサイン、マルディグラ・ビーズ、カラフルな旗を大量に飾った。

マイクルの最大の仕事のひとつは、この街で開催されるアメリカン・フットボールの決勝戦の舞台を再現することだった。ニッキーと彼のチームはまさにそのためにこの街にやってくるのだ。「ニッキーとジェスが“観戦”する架空の試合とそれに付随する大騒ぎの状況を演出しなければならなかったの」とマイクルは言う。

彼らは本物の公式戦用スタジアムで撮影することができたが、ファンが街の中やスタジアム内外で目にするであろうあらゆる物——看板、グッズなど——を含め、架空のリーグとチームを創り出す必要があった。フィールド周辺の既存の広告はポストプロダクションで CGI によって変更された。

こうして、全米アメリカン・フットボール・フランチャイズ(AFFA)、そして決勝戦に進んだ2チーム、ライノスとスレッシャーズが誕生した。この2チームが戦う様子をニッキーとジェスはVIP専用のスカイボックス席から見ている。それは撮影の便宜上、スタジアム近くのサウンドステージ——スペースシャトル“チャレンジャー号”のために作られた元NASA(米航空宇宙局)の工場——に作られた。

マイクルが直面した最大の難問は意外にもチームのロゴだった。「スタジアムなどの巨大なセットのイラストを監督のジョンとグレンに見せたところ、彼らはそのすべてにとっても満足したの。ところが、次にチームのロゴを見せたら、その後何週間も彼らが納得いくまでイラストのやり取りが続くことになったのよ」

マイクルによれば、それに関してもっとも役に立ったアドバイスは、元プロ選手で本作のフットボール顧問を務めたパット・オハラからだったそうだ。「彼からは、ロゴのデザインはまずヘルメットで考えろと言われたの。ヘルメット上でかっこよく見えたら、あとはTシャツ、バナー、そしてフィールドでも見ばえがするからよ」

ようやく承認されたロゴは、次に衣装デザイナーのデイナ・ピンクが選手用にデザインしたユニフォームと、エキストラに必要な衣装にも採り入れられた。

人生の大部分をアメフトのフィールドで過ごしたオハラはこう語る。「彼らの架空のフィールド作りは見事だった。本物の優勝決定戦に見えた。選手たちはリアルな環境を見て、さらにやる気が出せたので、とてもよかった」

顧問としての役割の一環として、オハラはフィールドで戦う2チームの選手役を集めた。「僕が雇った選手は全員がプロ・リーグの経験があり、最高レベルでプレーしたことがある。この映画で、彼らは再びパッドを身に着け、実力を発揮するチャンスを得たんだ。彼らは試合中の動き方を理解している。それはこの試合をリアルに見せるための鍵だった」

本作のストーリーに必要なプレーは特定のものだったため、オハラはフィルムメーカーたちに4つのプレーの選択肢を与えた。それは、30ヤード・ライン内で展開するものなので、必要なシークエンスを完成させるのに十分なスペースがあった。

さて、カーレース場のシークエンスはブエノスアイレスが舞台だが、その一部はニューオーリンズのダウンタウンから20分ほどのエイボンデールにあるNOLAモータースポーツ・パークで撮影された。その理由について、マイクルはこう説明する。「ブエノスアイレスの有名なカーレース場アウトドローモは、あまりいい状態じゃないのよ。1950年代あたりが絶頂期で、2009年以降、あそこでカーレースは開催されていないの」

本作に登場するインディカー・チームは、ブライアン・ハータ・オートスポーツ、アンドレッティ・オートスポーツ、そして有名なトーク番組司会者デイビッド・レターマンがオーナーのひとりで、マイダス・カーを使うレイホール・レターマン・ラニガン・レーシングだ。

幸い、ブエノスアイレスでも多くを撮影することができた。レクアとフィカーラが何年も狙っていた現場だ。

「僕らはそれまでブエノスアイレスに行ったことはなかったんだが、すばらしい話ばかり聞いていたんだ。そして実際にロケハンに行ったとき、もしかすると世界一フォトジェニックな街かもしれないと気づいた」とレクアは言う。

フィカーラも同感だ。「僕たちはロマンチックさを求めてはいたが、それが過剰だと困る。アルゼンチンは物にしても人にしても建築物にしても、すべてが多様多様に思えた。しかも、あそこではそんなに多くの映画が

撮影されていないので、撮影するには素晴らしい未開発資源だったんだよ」

彼らはさまざまな場所で撮影をおこなったが、そのひとつがシルクロ・ミルタル。サン・マルティン広場を見下ろすこの建物(軍関係施設)では、カーレースのグランプリ・パーティーのシーンが撮影された。3年前に別れたジェスをニッキーが再び見かける場所だ。

「私たちは、いろいろな理由でシルクロ・ミルタルで撮ることにしたの」と美術監督のマイクルは言う。「撮影可能だということは大きな理由だったし、先方が撮影招聘にとっても熱心だったことももちろんそうだけど、あの場所の利便性と、とにかく美しいということが最大の理由だったわね」

マイクルの美術チームにはまた、そこをパーク・ハイアット・ホテル(旧パラシオ・ドウオ邸)と“合体”させるという仕事が課せられた。ニッキーのホテルとして使うためだ。「建築物としての相性はよさそうだったんだけど、監督のグレンとジョンからは指示をひとつ、受けていたの。近代的にすることよ」と彼女は言う。「彼らは私が組んだ中でもとりわけ視覚的な監督なのよ。ふたりは建築様式をとってもよく理解していて、それを今世紀にもち込む方法を見つけてくれと私に頼んだの。新旧がとんでも美しく融合する形でブエノスアイレスという街を反映させる方法を。簡単なことではないと分かっていたけど、それも楽しみのひとつだったわ」

マイクルがその創造性を存分に発揮できた選択には、それぞれの環境にどのように色彩を融合させるかという点があり、それはとくにブエノスアイレスで際立っていた。「遊び心のある、魔法のような環境を思い起こさせるような色彩が必要だったの」と彼女は言う。マイクルは現地のスタッフとのコラボレーションを大いに楽しみ、地元の風習をセットに盛り込むうえで助けてもらった。そのひとつが、グラフィティ(落書き)のような都会的なアートである“ヤーン・ボミング”(「毛糸で爆撃する」の意味)。これはペンキの代わりに編み物でその街に“落書き”(街路にある木や自転車などに編み物をかぶせるストリート・アート)するのだ。

「真夜中に人々が街に出てきて、木の幹や枝にカラフルな毛糸を巻きつけたり、木を囲むようにセーターを編んだりするの。置いてある自転車でもパーキング・メーターで、何でもヤーン・ボミングするのよ。もうハチャメチャ。それで私たちは、ヤーン・ボミングをする人をひとり見つけて、彼女をラ・ボカ地区へ連れていき、撮影用にたくさんのお木々にヤーン・ボミングしてもらったの」

鮮やかに彩られた波形金属住宅が街路に並ぶラ・ボカは、サン・テルモのフリーマーケット、ファエナ・ホテルとともに、本作のストーリーに印象的な舞台を提供した。「ファエナ・ホテルはかつてれんが製造工場だったのが高級ホテルに改装されたの。その内装は(後期ゴシックの)フランボアイヤン様式に似ている」とマイクルは言う。撮影には、ユニコーンの壁飾りや、プールの黄金の王冠形の噴水など、既存の装飾物を利用しながら、そのホテルを、ガリーガの宿敵であるレーシング・チームのオーナー、マキューエンの縄張りに変身させた。

そのシーンにふさわしいトーンを呼び起こし、ストーリーの始めのほうでのニッキーの心の変化を反映させるため、マイクルは色を利用した。「この映画を視覚的に追ったとき、ニッキーのキャラクターとしての変化が分かるものでなければならなかったの。出発地点のニューヨークはとんでも寒く、彼は孤立している。だから私たちは、その隔絶感をかもし出すように、石、ガラス、金属を多用したの」

マイクルは続ける。「次のニューオーリンズでは、ジェスが彼の世界の一部になり始め、街にはもともと生命力があふれているので、色彩も生き生きしてくるの。スタジアムのスカイボックス内部は草木の緑とオレンジのトーンにして、紫と深いピンクも使ったわ。ニッキーが心を開き始めるにつれて、色も暖かくなっていく。その次はニッキーがいちばん精神的にもろくなるブエノスアイレス。彼がもっとも無防備になるのに応じて、色も弾ける感じになるの。建築物も見た目から楽しいものになり、このロマンチックでミステリアスな世界を視覚的に反映させ始めるのよ」

監督のフィカーラはこう語る。「エリザベス・マイクルの仕事はほんとうに大変だった。オープンホイールを使用するカーレース場、フットボールの優勝決定戦の舞台を本物らしく複製し、ニューオーリンズ、ブエノスアイレス、そしてニューヨークの街を再現したり、変身させたりしなければならなかったんだからね。彼女には絶妙なセンスがあり、現実逃避の雰囲気があるものかを理解しつつ、リアリズムの魅力もつかんだ。それは僕たちが狙っていたとおりのもので、彼女は僕らの心を読めるんじゃないかと思ったくらいだ。エリザベスとい

うすばらしい美術監督と組めて僕らはほんとうに幸運だった。もうほかの誰にも彼女とは組ませないよ」と彼は冗談を言って笑う。

フィカーラ、レクアの監督コンビとは以前にも組んでいる衣装デザイナーのデナ・ピンクも、ファッションと同様に配色を通して、キャラクター、ストーリーの雰囲気と意図の変化を反映させる機会を満喫した。「私がこの仕事を大好きな理由のひとつは、どの映画でも必ず何か新しいことを学べることなの」と彼女は言う。「この映画のために私がやったリサーチの中で、とりわけ興味深かったのは、色の心理学だったわね。色の専門家に話を聞き、誰かに信用されたい場合、そして誰かをだましたい場合に、私たちはどんな格好をするかということについて話し合ったの。色で言うと、信用されたいなら、青を着ること。青は信頼できる。青は水であり、空であり、決して変わらないものを象徴しているからよ。そしてウィル・スミスは青がよく似合うの」

レクアは、撮影前の早い段階のミーティングで、スミスが、「僕に何を着せたいかを言ってくれ。言われたとおりに着るから」と言ったことを思い返す。「ウィルはそういう人なんだよ。でも僕たちは彼に、とにかくデナと会ってくれと頼んだ。彼女は現役では最高の衣装デザイナーのひとりで、とくに男の衣装が得意なんだ。彼女はキャラクターを掘り下げ、一緒に旅をし、何がベストか見極める。ウィルは決してファッションに凝るタイプではなかったんだが、デナのせいでそうになってしまったよ。彼女の衣装に対する情熱はうつるんだ。あのふたりは、クランクアップ後に一緒にファッションショーにも出かけたんじゃないかな」

ピンクはこう語る。「ファッションが大好きで、着こなし方を知っているキャラクターに関して、演じる俳優とそれをどう表現するかを見極めていくのが私の大好きなプロセスなの。そして、ウィルとその機会をもてたなんて、かなりクールな経験だったわ」

マーゴット・ロビー演じるジェスもまた、映画の展開のなかで大きな変貌を遂げ、それは衣装から容易にうかがえる。「映画の冒頭では、ジェスはまだ“女の子”なの」とピンクは言う。「ファンキーで若くてキュートで小生意気な若い娘なのよ。服は重ね着とレザーね」

しかし、ブエノスアイレスに着くころには、ジェスは心身ともに完全に成熟している。「突然、彼女は洗練されたシルエットの女性として登場するの。すらりとして、彫像のようなスタイルになって」とピンクはにっこりする。

「映画の冒頭で僕たちが思い描いたジェスは、くすんだ金髪、ちょっとだらしない格好をした浮浪児みたいな雰囲気だった。着こなし方も自分自身の見せ方もよく分かっていない女の子だったんだ」とレクアは説明する。「その後、彼女はどこを見てもゴージャスで、男を冷淡に誘惑する女に変身する。デナはそれを見事に表現していたよ」

監督たちは、ジェスの“ビフォー & アフター”の違いを際立たせた貢献者のひとりとして、ヘア・デザイナーのアン・モーガンの名も挙げる。「ジェスはくすんだ金髪から、スウェーデン風金髪へ変身する。アンはとにかくすばらしいヘア・デザインを考えてくれた」とレクアは言う。

「ジェスのヘア・デザインは、グレイス・ケリーやキム・ノバクといった、僕らが目指していた古典的なファム・ファタールのイメージを連想させるものだった」とフィカーラは付け加える。

衣装を選ぶうえでピンクがとくに注意したのは、あるアイテムがそのシーンの特定の動きにおいてうまく機能することだった。「俳優たちがその中からより簡単に物をつかみ出せるように、ポケットをちょっとだけ浅く作らなければならないこともあったの」と彼女は明かす。「そういう珍しい形で、そのシーン全体がうまくいくように衣装を工夫するのは楽しかったわ」

ニッキー

「注意をそらすこと。極意はこれに尽きる」

スクリーン上で展開するシーンや演技をさらに盛り上げるのが歌と音楽だ。それをどういう形で達成するかを重視した監督コンビのグレン・フィカーラとジョン・レクアは、『ラブ・アゲイン』でも共同で音楽を担当した作曲家ニック・ウラタを再び起用し、そのシーンにふさわしい、示唆に富む曲作りを任せた。

「映画音楽作りとして、これはまさに胸が躍るような経験だった」とウラタは言う。「ジョンとグレンはとても音楽的な監督なんだ。脚本を書くうえでも、編集作業でも、音楽は大きな役割を果たすので、彼らはストーリーによく合う、ユニークな音楽のアイデアをつねにいくつも持っている」

ウラタは、その創作プロセスの一環として、本作のロケーションを十分に活用した。「このストーリーは、地球でもっとも豊かな音楽的環境がある2つの都市を舞台にしている。ニューオーリンズとブエノスアイレスだ。僕たちはそれぞれの街で長い時間を過ごし、そのサウンドと音楽の歴史にできるだけどっぷり浸かった。僕は、あの2つの街の豊かな文化の精神性に圧倒され、それを音楽で生かすために全力を尽くした」

この映画の制作が忘れられない経験となったフィルムメーカーたちは、観客にそのどの要素も楽しんでほしいと願う。フィカーラはこう語る。「この映画に登場するのは、アメリカン・フットボール、カーレース、セックス、ロマンス、コメディ、ドラマ、大スターたち、そして2つのすごく大掛かりな詐欺……。どんな人でも楽しめる要素が必ず見つかるはずだよ」

「そして、観ているうちに誰もがきつとふいを突かれるような、とんでもないサプライズも2つばかり盛り込まれているんだ」とレクアがほのめかす。「僕でさえビックリすることもある。脚本を書いた張本人なのに」

[キャスト]

ウィル・スミス(ニックー)
マーゴット・ロビー(ジェス)
ロドリゴ・サントロ(ガリーガ)
ジェラルド・マクレイニー(オーウェンズ)
アドリアン・マルティネス(ファーハド)
ロバート・テイラー(マキューエン)
B・D・ウォン(リ・ユアン)

[CAST]

WILL SMITH (Nicky)
MARGOT ROBBIE (Jess)
RODRIGO SANTORO (Garríga)
GERALD MCRANEY (Owens)
ADRIAN MARTINEZ (Farhad)
ROBERT TAYLOR (McEwen)
BD WONG (Liyuan)

[スタッフ]

Glenn・フィッカラ&ジョン・レクア(脚本/監督)
デニス・ディ・ノービ(製作)
チャーリー・ゴゴラック(製作総指揮)
スタン・ヴロドコウスキー(製作総指揮)
ハビエル・グロベット(撮影)
ヤン・コバッチ(編集)
エリザベス・マイクル(美術)
デイナ・ピンク(衣装)
ニック・ウラタ(音楽)
アポロ・ロビンス(アポロ役/詐欺・スリ 演出・監修) APOLLO ROBBINS (Apollo/Con Artist Adviser/Pickpocket Design)

[STAFF]

GLENN FICARRA AND JOHN REQUA (Written and Directed By)
DENISE DI NOVI (Producer)
CHARLIE GOGOLAK (Executive Producer)
STAN WLODKOWSKI (Executive Producer)
XAVIER GROBET (Director of Photography)
JAN KOVAC (Editor)
ELIZABETH MICKLE (Production Designer)
DAYNA PINK (Costume Designer)
NICK URATA (Composer)

2015年 アメリカ映画/2015年 日本公開作品/原題: FOCUS

上映時間: 105分/ビスタサイズ/5.1ch リニア PCM+ドルビーサラウンド 7.1(一部劇場にて)

字幕: 藤澤睦実/映倫区分: G/配給: ワーナー・ブラザース映画